第VI章　総　　括

第１節　長崎県における支石墓研究の現状と課題

(1)　長崎県支石墓研究史抄

①第１期　研究の始まり

日本の支石墓研究は戦前の朝鮮半島における調査を契機として，日本におけるその存在の追求から始まった。福岡県志登支石墓群（文化財保護委員会1956）や佐賀県葉山尻遺跡などの調査が50年代に相次いだ。長崎県では北有馬町原山遺跡と佐々町狸山支石墓がもっとも早い調査例である。

原山遺跡が日本考古学協会西九州総合調査特別委員会の調査対象となった経緯は，板付遺跡で確認された夜臼式土器と板付式土器の共伴の確認から一歩すすんで夜臼式土器の単純段階の追求という側面があった。調査は第II群のほぼ全域を発掘して36基の支石墓を確認した。下部構造は箱式石棺が21基，土壙墓が13基，甕棺が２基であったが，住居跡などの生活遺構は確認できず，支石墓を中心とする遺跡の性格から複雑な問題を投げかけた。調査担当の森貞次郎は，夜臼式土器が相当のちまで残存するのではないかとし，そうした現象を原山遺跡の地理的位置に求め，原山遺跡のあり方を北九州から遠く離れた辺遠の地であり「周辺地域」という位置づけで説明した。

その後森は北松浦郡佐々町の狸山支石墓の概報と日本における初期の支石墓の問題についてのべるなかで（森1969），日本の支石墓を碁盤形であり韓国の南方第III式にあたることを明らかにした。

②第２期　発掘調査の進展

第２期は，1970年代から80年代にかけての時期で，発掘調査の進展とともに支石墓の体系的な総括が行われる時期である。県内では諫早市風観岳支石墓群・鹿町町大野台支石墓群・江迎町小川内（こがわち）支石墓群などが発掘された。これらの成果は研究者の学説にも影響を与え，甲元真之は朝鮮半島の支石墓の編年をもとに西北九州における支石墓の系譜とその出現の時期を明らかにした（甲元1977）。甲元は風観岳支石墓の成果に着目し，朝鮮半島の支石墓との対比を行った。1979（昭和54）年，高野晋司は県内の支石墓を概観したのち，支石墓の構造について支石の有無や下部構造に着目して６型式に分類した（高野1979）。

史跡としての整備が進んだのもこの時期である。1972（昭和47）年には北有馬町原山支石墓群が国史跡に指定され，1979・80年の２年にわたって保存管理計画にしたがって史跡としての環境整備事業が実施され，補完調査が実施された。また1985年には鹿町町大野台支石墓群も国史跡に指定された。

またこの時期の後半は九州横断自動車道などの大規模な行政発掘が行われ，情報が飛躍的に増大する。福岡県新町遺跡，佐賀県久保泉丸山遺跡などの数10基から100基を越えるような大遺跡がほとんど完掘され，支石墓の構造を理解する上で大きな成果を得た。支石墓は一般的に薄葬であるため副葬品に乏しく編年的な位置づけに苦慮してきたが，これらの遺跡の調査によって，甕棺や供献された小形土器をもとにした精緻な土器編年が可能となった。

③第３期　現在

第３期は1990年代つまり現在の段階で，島原半島で新たに西鬼塚遺跡で支石墓が検出された（村川1996）他，西彼杵半島北端の西海町天久保（あまくぼ）遺跡の調査が長崎県教育委員会（安楽1994），ついで九州大学（九州大学文学部考古学研究室1997）によって実施された。九州大学を主体とする「支石墓研究会」の精力的な活動がこの時期を支える原動力であった。また長崎県における調査事例としては宇久松原遺跡の緊急調査や主要遺跡範囲確認調査による原山遺跡・狸山支石墓群の調査など支石墓遺跡に的を絞った発掘調査も３遺跡を数えるなど，支石墓をめぐって新たな研究の一歩が踏み出されようとしている。

(2) 長崎県における支石墓のあり方

現在長崎県において縄文時代晩期後半から弥生時代前期にいたる支石墓が検出された遺跡は13を数える(註4)。それらは県内各地にまんべんなく分布するわけではない。大陸との架け橋であった対馬・壱岐両島からは依然として発見の報がない。ここでは遺跡のまとまりから3つの地域に区分して支石墓のあり方の特徴を述べる。

①県北地域の支石墓

この地域は支石墓の密集地帯であり，遺跡数も7カ所にのぼる。宇久松原遺跡とは平戸島を介して至近距離にあり，その関係が注目されるところである。発掘調査が実施された遺跡は4つを数えるが，完掘されたのは農道工事に伴う江迎町小川内支石墓のみである。鹿町町大野台支石墓群，江迎町小川内支石墓，佐々町狸山支石墓の3遺跡は地理的にも近接しており，立地条件も眼下に沖積平野もしくは海岸線をみる標高25m～60mの丘陵あるいは丘陵先端に位置している。下部構造はいずれも箱式石棺であり，大野台支石墓群は3群60基程度と大規模であるが，小川内・狸山遺跡は10基程度のまとまりをもつ。出土する遺物は少ないが，大野台・狸山支石墓からは縄文時代の鰹節形大珠が出土しており注目される。この地域の支石墓の年代は佐世保市四反田遺跡の弥生時代前期後半（板付II a 段階）を除いて縄文時代晩期終末の夜臼式土器段階に該当する。

②県央・西彼杵半島の支石墓

この地域の支石墓は3カ所と少なく，しかも距離的に相当離れており分散している。そのあり方にも共通性はあまりないようである。西海町天久保支石墓は最近調査された遺跡で2群7基程からなり，箱式石棺が周辺に広がる。下部構造は方形に近い箱式石棺で，1基から碧玉製管玉15個が出土した。また出土した土器は夜臼式土器であり縄文時代晩期におくことができる。諫早市風観岳支石墓群は相当数の基数があるものと思われるが詳細は不明である。発掘された2基の下部構造はいずれも土壙であった。7号支石墓から夜臼式土器の小形壺および刻目突帯甕の口縁部が出土している。小長井町井崎支石墓は戦前の鉄道工事の際破壊されており詳しいことはわからないが，供献されていたという小形壺が保存されている。板付II式とされているが，きわめて夜臼式土器に近いものと思われる。

③島原半島の支石墓

この地域には縄文時代晩期の遺跡が密集するがその多くは中葉以前の時期で，支石墓を生み出した晩期終末の夜臼式土器を出土する遺跡はそれほど多くはない。支石墓は学史的に著名な原山遺跡と近年明らかになった西鬼塚石棺群の2遺跡にすぎない。なお島原市の景華園遺跡は大石の下から銅矛2点が出土しており，従来支石墓としてあつかわれることがあったが，時期的に中期に下がることや須玖岡本遺跡などの例からここでは標石墓とすることとし，分析の対象とはしない。

原山支石墓は戦後の開拓で発見されたもので，標高250mを測る丘陵に展開している。墓域は3群に分かれ総計100基を越す大規模な日本を代表する支石墓である。研究の初期の段階で調査され，多くの成果を上げるとともに問題点も指摘された。その一つが下部構造であり，もう一つが刻目突帯文土器（いわゆる原山式）の編年的帰属の問題である。前者についてはその箱式石棺の大きさが長さ90cm，幅50cm程度と小形であることから極端な屈葬で埋葬されたことが推測された。このことは屈葬という縄文の伝統を色濃く残すことを意味した。これについては国分直一および橋口達也の反論がある(註5)。

(3) 各地の支石墓のあり方

①糸島平野の支石墓のあり方

福岡県の支石墓の分布はほぼ糸島地方に限定されるといっても過言でない。そのあり方は1～10基程度の小規模な遺跡が普遍的な姿で，新町遺跡は例外的である。また支石墓は土壙墓・木棺墓などの墓制と混在することが通例で，支石墓の構築が終焉したのちも甕棺墓などの墓域として継続的に営まれる傾向が看取される。つまりこの地方では支石墓は連続する墓制のなかの一部分を占拠するもので

第15図　支石墓遺跡の分布図

番号	遺跡名	所在地		時期			基数		下部構造			供献・副葬品						人骨
		県		縄晩弥早	弥生前期	弥生中期	群	基数	土壙墓	壺・甕棺	箱式石棺	磨製石鏃	小形壷	小形甕鉢	貝製品	管玉	鰹節大珠	
1	宇久松原	長崎県	北松浦郡宇久町	○			1	8＋	7	1			○	○	○			5体
2	田助		平戸市大久保町					5										
3	里田原		北松浦郡田平町	?			2	3＋			3							
4	小川内支石墓群		北松浦郡江迎町	○			1	10			10							
5	大野台支石墓群		北松浦郡鹿町町	○			4	70	1									○
6	狸山支石墓群		北松浦郡佐々町	○			1	10									○	
7	四反田		佐世保市下本山町		○		1	1		1			○					
8	天久保		西彼杵郡西海町	○				5＋								15		
9	風観岳支石墓群		諫早市・大村市	○				20										
10	井崎支石墓		北高来郡小長井町		○			2＋					○					
11	西鬼塚支石墓		南高来郡有家町	○				1	1									
12	原山支石墓群		南高来郡北有馬町	○			3	100										
13	大友	佐賀県	東松浦郡呼子町		○		1	3	1						○			1体
14	割石		唐津市柏崎	○	○			6										
15	迫頭		唐津市宇木	○	○			3										
16	葉山尻支石墓		唐津市半田	○				5					○					
17	岸高支石墓		唐津市半田	○			2	9					○	○				
18	森田支石墓		唐津市宇木	○	○			16	16									
19	瀬戸口支石墓		唐津市宇木															
20	徳須恵		東松浦郡北波多村			○		10		10								
21	五反田		東松浦郡浜玉町	○				5					○					
22	佐織		小城郡三日月町	○				1		1								
23	南小路支石墓		佐賀郡大和町		○			1		1								
24	礫石A・B		佐賀郡大和町	○	○													
25	黒土原		佐賀市金立町	○	○			8	8				○					
26	久保泉丸山		佐賀市久保泉町	○	○		5	118	111	6	1		○	○				
27	四本黒木		神埼郡神崎町		○			1		1								
28	伏部大石		神埼郡神崎町		○			1		1								
29	戦場ケ谷		神埼郡東脊振村	○				1	1									
30	西石動		神埼郡東脊振村		○			1		1								
31	船石		三養基郡上峰町			○		2	1	1								
32	香田		三養基郡中原町	○				1	1				○					
33	小田支石墓	福岡県	福岡市西区	○				2					○					
34	新町		糸島郡志摩町	○	○			57	○	○		1	○			2		14体
35	志登支石墓群		前原市志登	○	○			10	10			6						
36	井田用会支石墓		前原市井田		○			1	1							22		
37	石ケ崎		前原市曽根		○			1			1					11		
38	三雲加賀石支石墓		前原市三雲加賀石	○				1	1			6						
39	曲り田		糸島郡二丈町	○				1	1				○					
40	石崎矢風		糸島郡二丈町		○			3	○	○								
41	長野宮ノ前		前原市長野	○				2	1	1								
42	年の神	熊本県	玉名郡岱明町			○		1							○			
43	塔の本		鹿本郡植木町		○			2										
44	藤尾支石墓群		池郡旭志町			○		9	3									

第3表　支石墓遺跡地名表

ある。橋口編年でいうと弥生早期の曲り田（古）式から曲り田（新）式段階および夜臼式段階とそれに後続する板付Ⅰ式・Ⅱ式の弥生時代前期の時期である。下部構造は土壙墓・木棺墓を主体にして，幼少児埋葬の大形壺を転用した甕棺などである。長崎県本土部にあるような箱式石棺や，佐賀平野に顕著な石蓋土壙などはみられない。

②唐津平野の支石墓のあり方

唐津湾に北流する松浦川の河口付近に注ぐ宇木川・半田川という小河川の流域にある沖積平野に面した丘陵の先端部に立地している。そのあり方は５基から10数基の支石墓が一群をなして存在する。下部構造は土壙がほとんどで、葉山尻遺跡・徳須恵遺跡の弥生中期の甕棺を除けば，夜臼式土器の壺棺が出土する。縄文時代晩期終末（弥生時代早期）に集中的に営まれている。

③佐賀平野の支石墓のあり方

背振山系から佐賀平野に伸びる丘陵の先端部が支石墓の墓域に選択されている。久保泉丸山遺跡・礫石遺跡のように大規模なものもある。下部構造は石蓋土壙が大部分であるが，小児用と思われる甕棺もある。後世の古墳造営によって上部構造は破壊されている場合が多く，上石の多くは残っていない。支石が確認できるものは約半数で，本来はすべての支石墓に支石を有していたものと考えられている。時期的には縄文時代晩期終末（弥生時代早期）から弥生時代前期後葉・中期にいたるものもあるが，概して平野部に位置するものが後出する傾向にある。

以上を要約するとつぎのようになろう。

地　　域	遺　跡　の　立　地	下　部　構　造
宇久松原遺跡	海岸近くの標高の低い砂丘	土壙墓＋大形壺の甕棺
県北地域	沖積平野や海岸を見下ろす丘陵	箱式石棺
県央・西彼杵半島	沖積平野や海岸を見下ろす丘陵	箱式石棺（主体）＋土壙墓
島原半島	高い標高の丘陵	箱式石棺＋土壙墓
糸島地方	標高の低い平野部	土壙墓・木棺墓＋大形壺の甕棺
唐津平野	沖積平野に突き出る丘陵の先端	土壙墓，甕棺墓
佐賀平野	沖積平野に突き出る丘陵の先端	石蓋土壙墓

(4)　宇久松原遺跡の支石墓のあり方

前項において長崎県内およびその他の地域の支石墓のあり方について，その内容を分析してきた。つづいて宇久松原遺跡の支石墓のあり方を検討してみたい。まず遺跡の営まれた地理的環境であるが，立地する場所は海岸部の砂丘地帯で標高は10m程度を測る。遺跡の北側には海岸を見下ろす丘陵が展開するが墓地としては選択されていない。他の地域では糸島地方を除くといずれも丘陵地帯が舞台であるのと対称的である。

本遺跡の初期段階つまり縄文時代晩期の墓地は支石墓と土壙墓の二者で構成される。墓域は砂丘の標高のやや高いところから選択的に利用されていったものと思われる。その後その墓域の周縁部に時期的に後出する弥生時代前期の墓地群が営まれる。つまり縄文時代晩期の支石墓とそれに続く弥生時代前期の墓地が複合する遺跡である。

また支石墓の基本的形態は碁盤形で下部構造は土壙墓であるが，支石をもたないものも，ある程度の比率を占める。支石墓に埋葬された人骨と同じ高さに埋葬された土壙墓の人骨はいずれも仰臥屈葬であった。熟年女性の一体はオオツタノハ製貝輪を装着しており，４Ⅰ２Ｃ型の風習的抜歯があった。その下位の壮年女性は４Ⅰ１Ｃ型の風習的抜歯をしており，いずれも縄文時代晩期人の特徴である低顔・低頭であった。一方，支石墓でも人骨は基本的に屈葬されており，土壙墓と同じような風習的抜

歯が看取されるものもある。また過去の調査で支石墓から検出された人骨にも風習的抜歯があり，オオツタノハ製貝輪を装着し，貝製の臼玉を足首に巻く（小田1970）など，今回の調査例と酷似する発見があった。このことは過去に調査された支石墓と今回の支石墓が一体のものとして理解すべきものであること，宇久松原遺跡の支石墓の時期が長期にわたらないこと，およびその数が10基を越えてもそう多くはならないことを予想させるものである。

第2節　宇久松原遺跡の位置づけ

(1)　宇久松原遺跡支石墓の年代観の変遷

宇久松原遺跡の支石墓は桑山龍進による紹介および小田富士雄による報告によって知られることとなるが，残念なことに支石墓から供献土器などが出土しておらず，その時間的な位置づけについては周辺の遺構から類推するより方法がなかった。しかも1968年の調査では遺構配置の状況が明らかにされておらず，また1977年の県による調査では支石墓が検出されなかったことから，その年代について研究者間に齟齬を来すことになった。

1968年の調査を担当した小田は，宇久松原遺跡の支石墓の年代について明記はしていないが「この遺跡では副葬土器や壺・甕棺から弥生時代初頭（板付Ⅰ式）から中期前半に及び・・」（小田1970）とし，時期的に幅をもたせている。

下條信行は「宇久島の松原遺跡から，箱式石棺や甕棺とともに二基の支石墓が出土した。なかの一基から検出された男性人骨は，足首に貝製小玉を着装していたが，他の一基の女性人骨は，腕に南島産オオツタノハ貝の釧を着装していた。彼らは縄文的遺制を強く残した貝輪社会のなかに生存していることを示していたが，弥生中期初頭に位置づけられるらしい支石墓の下から，そのような風習を伝える人骨の出土をみたことは，新来の墳墓型式が旧来の社会のなかに受入れられた事を物語っていないだろうか。」とし，弥生時代中期までその年代を下げる。また人骨にみられる貝輪などを縄文的遺制の残存で理解した（下條1976）。

岩崎二郎は北部九州の支石墓の集大成をなした（岩崎1980）。宇久松原遺跡の年代については「箱式石棺墓は2基あり一号石棺墓には板付Ⅰ式小壺が副葬されていた。壺・甕棺墓は板付Ⅱ式が4基，城ノ越式が2基，後期に属するものが6基ある。支石墓の時期は不明であるが，小田富士雄氏は板付Ⅰ式土器の存在や五島列島において板付Ⅱ式以降に弥生文化が流入した小値賀島以南に支石墓がみられないことなどから，弥生初期に板付Ⅰ式文化が宇久島にはじめて流入したとき支石墓も流入したと考えておられる。」とし，小田の見解を引用しながら弥生初期という年代観を示した。さらに1987年の論考では「五島列島の松原遺跡では甕棺墓が配石墓や支石墓と共存している。墓地は板付Ⅰ式から中期前半に及ぶが，支石墓は前期末～中期初頭で埋葬主体は土壙とみられる。」とし（岩崎1987），前期末から中期初頭という年代を想定した[註6]。

こうした弥生時代前期から中期という年代観のぶれはひとえに年代決定の決め手となる支石墓に伴う土器が検出されなかったことに起因するものであり，支石墓の周辺から出土した甕棺（壺棺）の年代に依拠した結果である。

(2)　宇久松原遺跡の編年的位置

①1号支石墓の大形壺の系譜と編年

この大形壺棺の諸元をもう一度記しておく。口径28.0cm，器高57.9cm，胴部最大径48.1cm，口頸部長17.4cm，胴部最大径高33.0cm。薄い平底で，胴部は肩がつよく張る。頸部は胴部と段をなし，沈線